

# カンキツにおける病害虫防除情報第1号

平成31年3月15日  
愛知県農業総合試験場  
環境基盤研究部病害虫防除室

そうか病の越冬量が多く、  
ミカンハダニの越冬密度も高い！

## 1 そうか病の発生状況

3月上旬に行った巡回調査(22ほ場)の結果、ウンシュウミカンにおけるそうか病(図1)の発病葉率が1.6%(平年0.5%、前年1.0%)、発生ほ場率が36.4%(平年15.9%、前年41.7%)で、**発病葉率は、過去10年と比較して最も高く、発生ほ場率は2番目に高い状況でした。**本病は、旧葉や枝の病斑内で越冬することが知られているので、**今春の本病原菌の越冬量は多いと予想します。**

## 2 そうか病の防除対策

- (1) 病斑内で越冬した病原菌は、降雨等により水分を得ると、胞子を形成して、それが発芽直後の新葉に感染していきます。特に、4～5月に雨が多いと、病原菌の活動も活発になり、多発する傾向にあります。**病斑が多く形成された枝が第一次伝染源となるので、見つけ次第除去しましょう。**栄養生長が盛んな若い樹は感染しやすいので、重点的に観察しましょう。
- (2) 表を参考に防除を実施しましょう。若い葉は本病に感染しやすいので、**発芽期における防除を徹底しましょう。**新葉以外に、幼果も感染しやすいので、**落花期も防除を実施しましょう。**
- (3) 窒素肥料が多いと、栄養生長が盛んになり、発生が多くなるので、**適正な肥培管理に努めましょう。**

表 かんきつにおけるそうか病に対する主な防除薬剤

薬剤名	使用時期	希釈倍数使用量	本剤の使用回数	成分	FRACコード
デランフロアブル(※)	収穫30日前まで	1000倍	3回以内	ジチアノン	M9
マネージDF	収穫30日前まで	4000～6000倍	3回以内	イミベンコナゾール	3
ストロビー ドライフロアブル	収穫14日前まで	2000～3000倍	3回以内	クレンキシムメチル	11
ナリアWDG	収穫14日前まで	2000～2500倍	3回以内	ピラクロストロビン、 ボスカリド	11、7

※皮ふに対して刺激性があるので皮ふに付着しないよう注意し、かぶれやすい体質の人は作業に従事しないようにする。開花期以降のマシン油乳剤との混用散布は葉害を生じるおそれがあるのでさける。開花期以降に使用する場合は、マシン油乳剤との散布間隔を30日程度あける。

FRACコードは殺菌剤の作用機構による分類を示す。

FRACコードの詳細は、[http://www.jcpa.or.jp/lab0/jfrac/pdf/code\\_pdf01.pdf](http://www.jcpa.or.jp/lab0/jfrac/pdf/code_pdf01.pdf)を参照する。

農薬の散布に当たっては、ラベルの表示事項を守るとともに、他の作物や周辺環境への飛散防止に努める。

### 3 ミカンハダニの発生状況

3月上旬に行った巡回調査（22ほ場）の結果、ミカンハダニ（図2）の寄生葉率が6.0%（平年1.4%、前年7.1%）、発生ほ場率が50.0%（平年19.6%、前年29.2%）で、寄生葉率は、過去10年と比較して2番目に高く、発生ほ場率は最も高い状況でした。本種は、非休眠性で、気温が約8.0℃以上になると増殖可能となります。今冬は、平年と比べて暖かかったため、密度が高まったと考えられます。

### 4 ミカンハダニの防除対策

- （1）本種は初夏から夏にかけて急激に増殖するため、密度の低い時期からマシン油乳剤などで防除を実施しましょう。
- （2）本種には、カブリダニ類などの土着天敵も多く、これらをうまく生かした防除体系を組むことも重要です。土着天敵に影響が大きいとされる合成ピレスロイド系や有機リン系の殺虫剤は、必要以上に散布しないようにしましょう。



図1 そうか病



図2 ミカンハダニ